

わたしの仕事場の窓の、竹の四角格子に、一滴の露がぶらさがって、震えている。

その小さな球体は、朝のさまざまな色をその中で繰り返すように映し出している——空や野原や遠くの木々のそれぞれの色を。球体のなかをよく見ると上下さかさまの像になっている——小屋やその戸口で遊ぶ子どもたちもさかさまになって、顕微鏡を覗かないと見えないう像のように小さく映っている。

目に見える世界よりもはるかに多くのものが露のしずくのなかに映し出される。目に見えない世界も、尽きることはない神秘をたたえて、同じようにそのなかに再現されている。そして、その一滴の内側にも、また外側にも、とどまることのない動きがある。原子や作用する力のどこまでも果てしない動きがあり、また、かすかに震えながら、風と陽の光に触れると、プリズムを通したような虹色の光で応えている。

このような露の一滴のなかに、仏教はもうひとつのマイクロコスモス、小宇宙のしるしを見出す。それが「たましい」と呼ばれてきたものである・・・目に見えない究極のものをほんの一次的に球体としてあわらしているもの——空と大地と生命(いのち)を映し出しながら——永遠の不可思議なおのきに満たされて——ひとを取り巻く霊の世界の (ghostly) 力のざわめきひとつひとつに何かしら応えていくもの・・・そのような露の一滴と比べれば、ひとは、いかほどのものだろうか。

その小さな光の玉は、妖精めいた淡い色彩や、ひっくり返ったかざかざの映像もろとも、じきに見えなくなつて消えてしまう。また次の短いあいだが過ぎれば、まさにあなたやわたしとて、同じように、散り散りになつて消えていかねばならない。

しずくが消えていくことと、ひとが消えていくこととのあいだには、いかなる違いがあるうか。ことばの違いはある・・・されど、露のしずくがそのあとどうなるか、と問うならばどうか。

太陽の大きいなる力によって、水滴の原子が分離して上へと昇って散っていく。雲や地面へと、河や海へとそれらは向かっていく。そうしてまたふたたび地面から上へと、川の流れや海面から上へと引っぱられて昇っていき、結局また、あらためて落ちて散らばっていく。やがて、真珠色に光る霧となつて低いところを漂い——霜や雹(ひょう)や雪の白さを身にまとい——マイクロコスモス、大宇宙にあるさまざまな形と色とをふたたび反映して、いまだ生まれてはいない心臓の深紅の脈動に合わせて鼓動する。ひとつひとつが無数の同族原子とまた結びついて、ほかの多くのしずくを作る——露や雨や樹液のしずくとなり、血や汗や涙のしずくとなる・・・

何回それが続くのか。わたしたちの太陽が燃え始める何十億年も前から、この原子たちは、きつと、どこかほかの水滴のなかで動き、どこか過去の銀河の、それぞれの世界にある空の濃淡や地面のいくつもの色を映してきたのだろう。そしてこのいまの銀河が宇宙空間から消えてしまったあとも、この同じ原子たちは——それらを作った計り知れない力の作用によ

って—きつと引き続き丸い露の形になって、これから誕生してくる惑星たちの朝の美しさを影のように映していくことだろう。

あなたがまさに自分自身と呼んでいるその複合体の粒子についても、やはり同じである。あなたをなしている原子たちは、太陽と月と星々よりも前から存在した—そして震えて、—それから活発に動き出して、—そうして、万物の姿を映し出した。そのあと、透き通った夜のあらゆる星がみずからを焼き尽くしてしまうと、これらの原子たちは、ひとの意識(Mind)が球体のかたちをなしていく流れにもきつとまた加わって、—かざかざの思考や感情や記憶のなかでふたたび震え、—今後進化していく種々の世界で生きられる生命(いのち)のすべての苦痛や喜びに震えることにもなるだろう・・・

あなたの個性とは？—あなたの個人としての特異性とは？それは、いいかえれば、あなたの考えや、感情を込めた意見や、かざかざの思い出なのだろうか？—あなたであればこそその希望や恐れや愛情や憎しみなのだろうか？ああ、きつと何兆もの露のしずくのひとつひとつに、原子の震え方やものの映し方の極めて小さな違いがあるはずだ。そして、「誕生と死の海」から上へと引き寄せられた、霊魂のごとき(ghostly)水蒸気の、数限りない真珠のような個体のひとつにも、同じように極めて小さな、それ自体が持つ個別の特徴がある。あなたの個性は、この永遠の秩序のなかにおいて、どれであれひとつのしずくが震えるときの粒子の特別の動きと同じ意味を持っている。おそらくほかのどのしずくにおいても、震えることや世界を描き出すことがまったく同じになることは決してないであろう。ただし、水滴は集まり続け、また落下し続け、震える絵が絶えず映し出されていく・・・間違った考えのなかでもっとも間違っているのは、死ぬことを失うことと考えることである。

失われるものなどなにもない—失われることが可能な自分自身というものなどはないからである。それがなんであつたとしても、あなたは存在してきた。—それがなんであるとしても、あなたは存在している。—それがなんであろうとも、あなたはそうなって存在しているかねばならない。個性をもつこと！個別であること！—それは夢のなかの夢に映る霊たち(ghosts)なのだ。あるのは、ただ無限の生命(いのち)のみである。そして、存在するかのように見えるものすべては、ただ生命(いのち)の震えである、—太陽、月、星々—地面、空、海、—意識(Mind)と人間、そして宇宙空間と時間。それらすべては映った影である。影はやってきては去っていく。—影の作り手は終わることなく作り続ける。